

中川根ふる里通信

= 第24号 =

編集・発行・モアブの中川根
 連絡先 〒428-003
 静岡県榛原郡中川根町
 上長尾259-6
 郵便振替 ふる里通信係
 口座(名古屋) 7-81556



水川高知山より ^{む ぎ れ や ま} 無又連山 全景

新しい年を迎えて

年末の寒波もお正月には和らぎ、おだやかな年終を迎えま
した。大札山よりの初日もみごとでした。今年こそ平和に
成る様お祈りしました。

去る事はおわすしと申しまでも、昨年は誠におだやかならぬ
事態が多すぎました。

ペルシャ湾危機が正月早々、戦争に変わり、戦争の正当性を
しめす為の戦闘状態がテレビにうつり……。当地方雨期に
ならぬ前突然終結。クエート油田は炎海と化し、有毒ガスを
まきちらし、ペルシャ湾は油だらけになり、イラク、イスラエル国民
だけでなく、外国人失業者や、難民も出、それなのにパレスチナ
問題は解決しなかった。それどころか、生物(人も含め)の命をう
ばい自然破壊が成されてしまった。

又、自然の力のすごさ(さ)もまざまざと見せつけられてしま
いました。雲仙普賢岳、スリピン、スラツボ火山と、噴火が
続き地球の底力のもと、人の力の小ささも感じました。

そしてソビエト連邦解体と

銭が町でも、お茶が霜害もなく上質だったのにもかかわらず
値だんが安かったとの声が多く聞かれました。生産者にとっては
誠に苦しい状態なのですが、その分、おいしい川根茶がより安い
価格で消費者に吞んでいた、だいているのでしようか。

平成四年今年はいよいよ年になるのでしよう。中川根町では、
町制施行三十周年を迎え、又年末には役場新庁舎が上長尾に建
設され、ふる里創生資金の最大活用先の地場産業会館が水川
地区につくられるなど、躍動の年になりそうです。

私達町民は健康な毎日がおくれる事と、これ以上人口が減ら
ない、又高齢化率が上がらない様、町民、町当局も真剣に取り組

んで行かなければならないと考えます。それには第一に働け
る場がある事、家を継いでくれる人(子)がいる事、そして、その人
に、お嫁さん、お婿さんが来てくれること……。そうすれば、
あまりのちがひ、中学校の教室も、川根高校も、十数年前の状態
になるように思えるのですが、現実にはなかなかきびしい様で
す。また四月、百人ほどの転出者(多くは高校卒業生)が出るので
しようか。

緑の町にふさわしい若者にも好かれる町づくりを期待します。



左ページ同様、秋季演習
中川根中グラウンドにて。

写真説明

左ページ、旧中川根中グラウンド、土手道向、ミツは
長尾川にて放水。昭和三十年代秋季演習。
右上、近年の初出式における大井川(高柳前)にての
放水。



徳嶋 莫男さん（藤川）

十年一昔と言いますが、今日の時代推移は急変遷、三十年は遙か彼方に過ぎ去って消え、おぼろげの思い出のみとなって

あのころ...

しまいました。

町制施行にあたりましては、いろいろの制約があり、「連帯戸数がどうか、消防施設がどうか、あるいは村でも差支えないではないか」等々論議され、川根三町では一番後に議会議決したことを思い出します。

全く当時の消防施設装備は、お粗末なもので、道路整備等に比べてようやく三輪ポンプ車、輸送車が配備された位で、主力は尚従来の可搬ポンプの時代であり、そのため、災害現場への移動は、大変困難でありました。

また、当時は家火事はもちろん、山林火災が多発し、従って団員の出動も多く、隣町への大水害時にも、応援出動するなど、消防団の存在は大変大きなものでありました。

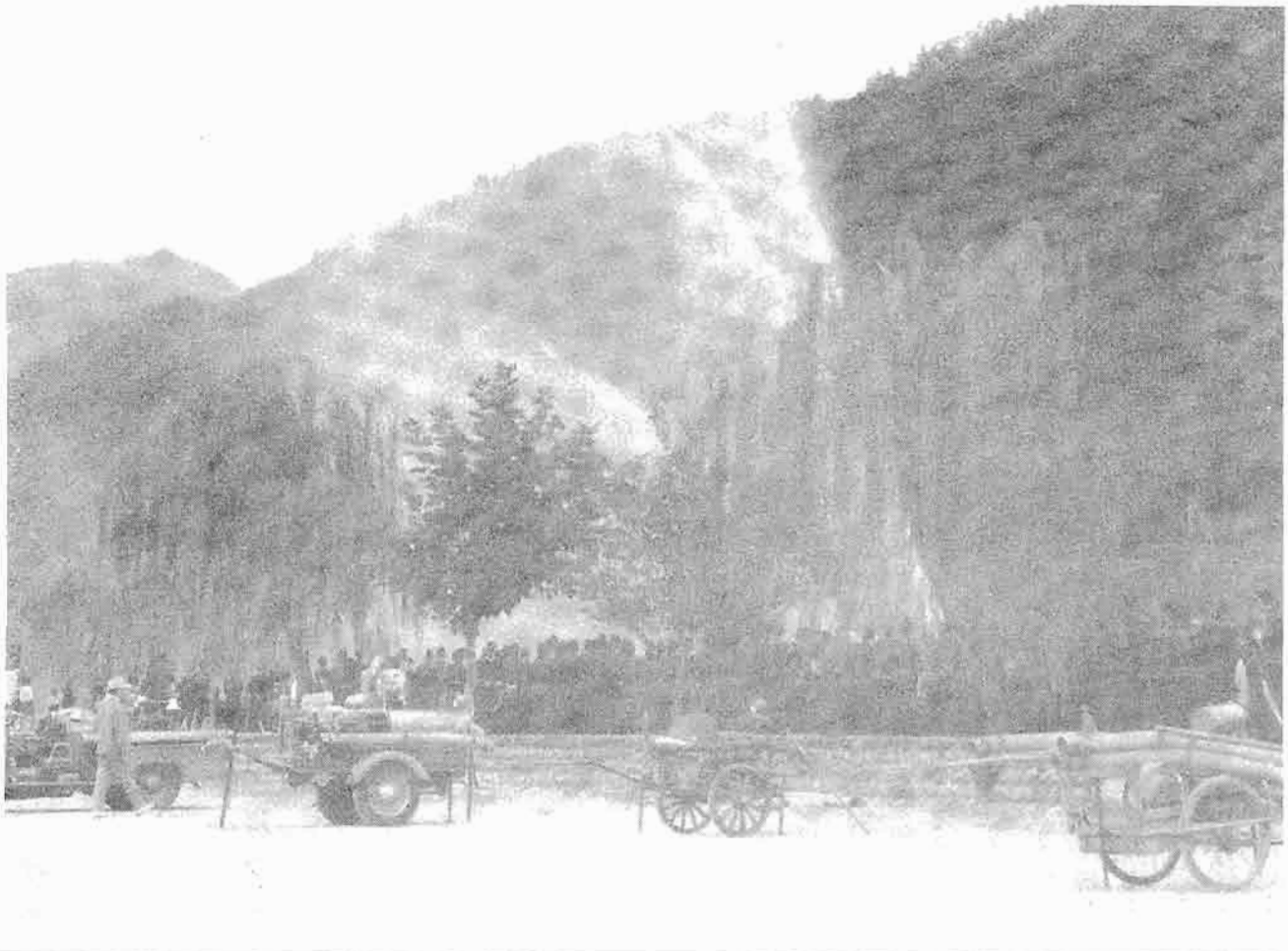
しかし、このころ既に、若者は都市への流出傾向にありまして、団員確保には一方ならず心を痛めたものです。

やむを得ず地域住民の協力を得て、定数の削減を断行して、現在の編成に踏み切ったのも、このころで、責任と心配の思い出が残ります。

消防は、住民を災害から守る唯一の団体組織であります。今日、見違えるほどに充実した伝統ある消防団が、変えられぬ精神を継承して、大任の為に活躍されますことを願って止みません。

元 中川根町消防団長 収入 役

あのころ... 町議会議員など歴任されています。説明は+ページをご覧ください。



静岡新聞中部版に「シリーズで『この人』の企画があります。みなさん何かで活躍なさっていらっしゃる。興味しみに見ておきます。あまり中川根関係の人が載っていないのが残念ですが、中部地方広し、ですから、中川根出身の人が見つけれなかった時は、はっとします。数日前、長島初雄さんが、昨春、小野田晃乃さんが『この人』に載っておりました。ご紹介致します。小野田さんも田野口出身、長島さんは焼津方面『川根会』の会長さんです。

焼津・インドネシア友好協会の会長

長島 初雄 さん (焼津市ミヤ名 八四四ノ二)

中川根田野口出身。昭和四十七年、焼津豊田小学校長を皮切りに、港小、藤枝中央小の校長を務め、焼津西小学校長を最後に五十八年、教職から退いた。

昨年十二月に発足した焼津・インドネシア友好協会の会長を引き受け、第一回の事業でもあるインドネシア中高校生の受け入れと一月に行った。六十八歳。



協会の会員は現在四十三人。『インドネシア中高校生たちの受け入れを焼津で行ったのは、今年で六回目、協会の会員は、今までホスト家庭を引き受けてくれた人々、が中心』。

今年は十二人の中高校生とリーダー一人が来日。「六日間、焼津市に滞在した。ホストファミリーとの交流ばかりでなく、小・中学校を訪問しての交流など、インドネシアの子供たちにとって印象深い日本での旅だったと思う。」

自らも過去三回ホスト家庭を引き受けた。「やってくる子供

たちは、いずれも小さな外交官。言葉や生活習慣の違いはあっても心を通い合わせることが出来る。」
六十年にはインドネシアを訪問したことも。「焼津市民約二十人で訪れたが大歓迎を受けた。ささやのだが、市民レベルの真の国際交流が図られたと自負している。」
将来は、日本の子供をインドネシアに送り込み友好親善と深めることも計画している。

松坂屋静岡店の女子サッカーチーム

「カトレヤレディス」の主将

小野 田 晃乃 さん (清水市草薙)

声の大きさと、活発で人見知りしない性格を買われて、主将に起用された。スポーツ万能でパラグライダー、水上スキー、テニス、水泳、バスケットと何でもこなす。中川根町出身、二十三歳。

静岡県といえは野球よりサッカー。「サッカーには『走る』、『青春』などのイメージがあります。これを機にサッカーをする女性が増え、会社のイメージが著しくフレッシュになればと思います。温かい目で見守ってください。」

率いる部員は平均年齢二四・三歳でサッカー経験者は皆無。四月二十七日、同店主催のカトレヤ杯が初陣。

「キャプテンといってもみんな初心者なので、他の人何ら変わ



りありません。今はルールを覚えたり、リフティングやランニングなどの基本練習をしています。毎日筋力痛との闘いです。みんな不安ばかりなので、互いに励まし合って頑張っています。カトレヤ杯では、なんとしても一点を取ってみたいで





す。
 職場では受付嬢として見回り、駐車券切り、案内などの多様な仕事をこなす。「親切、優しさをモットーにしています。言葉遣い一つでお客様の視線を損ねてしまうことがあるので大変です。逆に感謝状やお礼の手紙をもらったときは、本当にうれしいです。」
 小さい時は保育さんになりたかった。今は主婦志望。「上が兄二人のせいかな。子供のころは野原を駆け回ったり、木登りやサリガニ、補りなど活発なものでした。将来はスポーツ万能の人と一緒に活躍して子供をサッカー選手にしてみたいです。」
 しばらくは他のスポーツよりサッカーを最優先します。

静岡新聞中部版 『この人』より

お二人のご活躍を期待致します。

おんべおくり



土屋猪三雄さん宅の節分カラカゴ

関蔵地区でも続けられているそうです。春近一を感じるおんべおくりです。

「おんべおくり」何だかご存知ですか。おんべは御幣のこと。尾呂久保と松尾地区に昔からずっと行なわれて来た行事をご紹介します。二月八日、尾呂久保を訪れてみました。
 お登すぎセ戸の皆さんがそれぞれ御幣を手にお堂へ集まって来ました。御幣にはヒルや菜がつけてあります。かつては麦だったのですが、御幣に御神酒をかけて、みんなそろって白羽山神社方面に向って出発しました。やかて神社につきまいた。おくる所は神社でなく、鳥居横の地に写真の様に一軒く納めて行きます。みんながおくり終ると静かに引き返して行きます。その時決して後ろをふり返ってはならないとの事です。
 御幣は大小さまざまで、土屋鉄郎さんのお宅は、書初めの紙で作るのがしきたりだとの事です。無病息災、子供の健康を願うこのおんべおくり、いつまでも続けてほしいと願います。
 以前は梅島、ハ中でもやられていたとの事です。現在、大井川奥の

遠州藤川村あゆみの展示会

藤川ふれんど俳句会

平成四年一月六日、藤川集会所に於て、藤川ふれんど俳句会、中川根町史研究会藤川班の皆さんが、「遠州藤川村あゆみの展示会」を開催し、終日地区内外の人々が会場を訪れ、大変な盛り上がりでした。その陰に開催にあたり、研究調査資料収集、展示表づくりなど長い時間を費された高本鷹一さんのご尽力がありました。

催しの様子をご紹介します。

藤川地区はその昔、藤原の里と呼ばれていました。山井平は恋平と書かれていました。榛原川と呼ばれる様になったのは明治からで、その前は藤川だったそうです。その藤川を逆上った所に、相木さんの伝説の恋の代があったり、古来よりロマンに満ちた郷の祿です。



又、ルートと求める鍵として、信州街道があります。地区と登って藤川(榛原川)添いに、板取山(二五三)に登り、蕎麦粒山(千石平、奈良代山(ナカミ水産町)ヒヨウ越峠方面へ通じていました。現在道は跡をとどめていないようですが、野仏や祠が残っています。往時、所々に目印の樫の木があったと聞くに付け、旧中川根他の地区同様、西か比の方への交流が多かったことが考えられます。

藤川地区には、七社・七寺・七仏と沢山の神社寺院がありました。現在、山や畑などになっている所もありますが、それらの跡地を調べて絵地図に示されています。

大井神社関係の書類を見ますと、創建が延喜十二年(九三三)と徳山三神社の次に古い神社であるのが判ります。そして五十年から百年ごとに再建されて、現在で二十回目の再建となります。他地区の神社は歴史がなかなか判らぬのですが、この神社史からも藤川地区の古さがうかがえる様です。



観天寺関係図、曹洞宗関係図など系図に示されて、その詳細が判る様に記されてあります。

天皇社御神体、同様に、火災の際、神主であった、神田さんの手で焼失をまぬかれたとの事です。

その他、銅鏡(手鏡)、野仏、写真、古文書、絵画軸、天保時代暦など、展示品が、会場せまーと置かれ、皆さん熱心に見学していただきました。

高本さんには、以前、中川根町史研究会で、藤川地区の歴史のお話を伺いしました。ここに再び、藤川の歴史と地区の皆様共々、研究発表なされた事は、十年ひと昔と申します様に、ごく近年の出来事さえも、わすれさってしまふ世の中に、教へと開いてくださった様は、思えます。藤川地区の財産が、ふえました。



私にも中山根は、大井川兩岸段丘を中心に、縄文時代の遺跡が点在しております。特に上長尾遺跡からは、多数の出土品が長年に渡って発掘され、その頃人間が住んでいた事は判ります。その後、千数百年、縄文時代から、人が定住していたものか、否か、実証出来る遺跡など何一つ手がかりになるものが無いのも事実であります。

したがって、私どもの一番古いできごとで、町内の歴史のはじまりになっているのは、南北朝時代(14世紀)となっております。この時代以前より、大井川兩岸には、多数の集落が存在していた様に考えられます。

特に現徳山地区に存在した三神社の創建が9世紀である事、当地区を中心に、土岐氏が北西駿河地区を支配していた事もあり、無双連山山頂には、土岐氏の山城「徳山城」があり、徳山森之段には、土岐氏の館がありました。

さて、南北朝時代は、南朝方の徳山城が、北朝方の今川氏に攻め落とされたり、或は島田の千葉山・智満寺の僧兵たちが、南朝方に味方して合戦に負け、お寺を引き払って上長尾へ逃げこんで来たたりした、大変騒がしい時代でした。

徳山城に付きましては「無双連山」本城山に山城があった事など、町民ほとんどの人が知っておりますが、中川根所史、文化財冊子などで紹介されている程度であります。三年ほど前、ふる里通信地区紹介で、壺町河内、文沢を載せた事がありました。当地区を訪問したのがきっかけで、徳山城関係の研究をされた方がいらっしゃる事が判って来ました。

その方は、沼館愛三先生とおっしゃる、城址、歴史研究家で、昭和初期、文沢の杉山藤内氏(杉山隆一氏厳父)の案内



特集 徳山城 その1.

に依り、無双連山中を調査し、『無双連山を中心とする諸城址の研究』を、静岡県郷土研究第三集に発表されていた事実が判明致しました。(御両人とも故人)

沼館先生の学術論説を広く皆様知っていただきたく、又、中山根に、中世の城址が残されている事も知っていただきたく、今回より特集を組んでみました。沼館先生の原稿は、旧字体でなかなかむづかしいので、要約して載せさせていただきます。又、現地の様子など、諸々の事も含めて、おくりします。

無双連山へのいざない

寺沢村のこと

徳山城と寺沢村との関係は？とお思いかも知れませんが、先に記しました様に、地区紹介の時の様子もふり返ってみましょう。教育委員の方から「文化財関係で、壺町河内文沢地区の年中行事などを地区の比呂さんにお伺いに行くから取材に同行しては。」との連絡により同行させていただいたのは平成元年六月十六日、区の集会所には、地区の長老、五人の比呂さんが集まっておられ、貴重なお話を聞くことができました。その中で気掛かりな事項が三三ありました。

★寺の沢(水源地、本城ナギ付近)にかつて『寺沢村』があったこと。

★入屋さん(壺町河内)の裏の山高い丘に、誰のものとも判らない墓所、五輪の塔、付近にぬけ穴があったこと。

★つい近年まで(河内川林道ができるまで)壺町河内・下泉間は、道らしい道もなく、遠い存在であった事、などです。

特に「以前寺沢村に、二十五戸位の人家と寺があった。」と言う事を聞いたことがあります。その跡などはありますか？



寺沢村跡地の一部 対岸林道より

一目見て、文体が現代文でないこと、漢字も旧字体であること、半世紀の時をこえ、印刷が不鮮明なこと、などから大変難解な文集であることが判りました。『これは寺沢村どころではない、たいした本だ』。そのうちに、『これは小学校高等科の生徒が研究出来る内容ではない。誰の指導のもとにやったことなのだろう』との素朴な疑問がわいてきました。

沼館愛三先生を知るまで

その年の秋も深まる頃、寺沢村云々等の冊子が手に入りました。本の名前は『城址本、城山の研究』。昭和十二年五月十日、新校舍落成記念、徳山第一尋常高等小学校、と書かれ、ガリ版刷り、ニセペーじに

どうでしょう。書物も見たように記憶していません。質問された方に「何もわかっていないですよ。寺沢村ばかりでなく、文沢のことが新聞や冊子に載ったことも、見に来た訳でもないから」のお答えも気になり、また、遠い昔、二十歳もあつた集落が、又、遠い昔、忽然と消えた、と聞いたこと、寺沢村のことを、もっと詳しく知りたくなりました。

中川根町史に、寛永拾四年五月二日(一六三六)駿州志太郡上藤川村文沢御水帳(検地帳)「杉山家文書」に寺の沢……のことが記されている位のものでした。(文沢地区は旧寺沢村も含め、昭和三十一年町内合併されるまで、志太郡東川根村文沢で、無双連山頂も同様です)

および研究文集でした。一目見て、文体が現代文でないこと、漢字も旧字体であること、半世紀の時をこえ、印刷が不鮮明なこと、などから大変難解な文集であることが判りました。『これは寺沢村どころではない、たいした本だ』。そのうちに、『これは小学校高等科の生徒が研究出来る内容ではない。誰の指導のもとにやったことなのだろう』との素朴な疑問がわいてきました。

知りたがりやの性格は困ったもので、誰が本、城山の研究をしたのだらうかに考えが交わり、聞くは一時の恥、聞かぬは一王の恥の諺に、たがって、当時のいささつと地元の人に聞いて見る、とにしました。

二、三人の方にお伺いする内、意外な事実が判りました。当時の事情を最もご存知の方は、徳山地区の方ではなく、文沢の杉山隆一さんでした。

「あの本は、ある方が研究探査された学術論文を、勝手に写しただけのものです。誰がやったのでしょ、うかね」と答えられました。

あるお方のこととお伺いしますと、「その方は沼館愛三と言う人で、当時静岡中学の先生で、城址等と諸方面で研究された方です。徳山城関係の諸城址も、あの広い無双連の山や谷を何日もかけて駆け巡り、実証された最後に、我が家に来られ、父(政隆内氏)に案内を請われました。後、『無双連山を中心とする諸城址の研究』を発表されました。先生は、県立図書館、英文庫にもお勧めされたようです。他界されていますから、もうお逢いすることはできません。」



入屋さん裏山の五輪の塔。外、墓所もあります。

このような道を辿りやうと、沼館愛三先生に巡り逢う事が出来ました。今まで、徳山城関係の書類をいろいろ見ましたが、町史、文化財冊子を見ても、沼館先生の名前は載っておりません。はじめてのお名前でした。返すくも残念な事は、『城址本、城山の研究』に、研究者が書かれていない事です。その後、教育委員会にお覧いして、県立中央図書館より、真の元本のコピーを手にする事が出来た時は、一年の時間が流れていました。

無双連山を中心とする諸城址の研究

一 緒言

沼館 逸文 三

西駿山岳地方は、山又山、谷深く、羊腸たる小径は、少しの兵力でも、大敵に抗し得る天然の要害である。大井川の流れば、えんえんとして、巨岩を砕き、巨木森々として奥深く、山村家屋、わずかに、兩岸に点在するのみである。

この様な地形であるから、往古より、武將が大活動するには、不便であったが、しかし守勢防御の地としては、当地方は、まれに見る、天險要害の地である。されば六百年の昔、南朝方たる、兼科・土岐・佐竹の諸氏が、無双連山の徳山城を中心とする諸城砦にたて、もりて、足利方たる、今川の大軍を拒止して奮戦し、或は、今川氏真は敗兵して、この地に遁入し、武田氏の鋭鋒を避けたのであった。そして両者共に、この要害無双の天険を要しながら、遂に、悲運に際合して、事志と違ひ、雄圖空しく消え去つたのも、天の利は人の和に如かなかったのである。土岐・小長谷氏らが、時に、盛衰はあつたが、しかもなおよく数百年の間、この祖廟の地を保持し、えんえんと利は、之を見逃し得ぬものがある。

私は、東川根村の研究家、杉山藤内氏の案内にて、無双連山の幾多の城砦群を、踏査するに及んで、その規模の雄大なる、その天然の要害無双なる、実に驚くべきものがあると発見した。

当城砦群は、狩野氏の安倍城と共に東西の二大要害で、山城の防備設備に於ては、けたし標準的のものであろう。この地、僻在の爲め、世に知らるゝ事少なきをもつて、あえて、この一端を叙して、卑見を述べ、る次第である。



二 史実の大要

当地方一帯の古城址は、その起源の詳らかなものがない。そしてその名の著はれたものに、土岐氏、犬間氏、兼科氏などがあるが、その中でも土岐氏が最も古い。

いつから当地に入部したか明らかではないが、始め土岐氏と称し、小長谷(現本川根町小長井)に居住してから、小長谷を氏とした事は明らかである。

土岐氏は、清和源氏で、その系図によれば、源頼信の孫清房は、河内に居住し、その子清則は、駿河に移住し、それより忠政・定康、長次、信則を経て則詮に至る。則詮は、永仁年中(二九三三-二九三九)小長谷に居住してから小長谷氏と称し、長門守に任じ、元亨二年卒(三三三三)とありて、之を中興の祖としてある。それより則明、尚政、家詮、清光、信家、康信、政清、定進、政房と九世相次いだ。定進は、武田氏に属し、度々戦功があり、武田氏に賞せられたが、武田氏が敗退するに及んで、政房城を挙げて降伏し云々とあり。その後小長谷城北方約千メートルの大島というところに土着し、近年に及んだとの事である。しかし、その系図の真意に就いては大いに研究を要するものである。

さて、いつまで土岐氏と称したか、正平年間(南朝元号一三四六-一三六〇)土岐考太郎が、しほは、今川氏と対抗した事が、文和二年(北朝元号一三五三)二月の伊達軍忠状に見えているから、この頃は、なお土岐氏と称したことは明らかである。

しかし一方には、則詮は、永仁年中、小長谷に築き、依て氏といたとあるので、この辺は曖昧であるが、正平八年(一三五三)土岐考太郎が、徳山城陥落近は、彼が卒したる元亨二年より三十二年を経過しているから、考太郎と稱する人は、則詮の子則明か、孫尚政のうちであらう。

又、徳山城は、長享(二四八七-二四八九)の頃、土岐山城守文子の居城と

も伝えられているから、さうすると、正平八年徳山城陥落はお百三十二年と経過した後も、なお土岐氏を称していた如く思われる。

土岐氏は清和以来、尾鷲を城之内(徳山)に置き、本城を無双連山に置いたが、更に小長谷に築城し、本姓土岐を称しながら、一方小長谷を稱していたものであろう。小長谷城は一名徳谷城とも言い、徳谷は、土岐の谷の意であるに徴しても、これを推察しうるであらう。

土岐氏は永い間近郷に於て威を振るひ、徳山城を中心として数々の戦闘をなした事と思われるが、その最も確實と思われるのは、正平八年、今川氏との対戦である。すなわち、正平七年閏二月二十日、今川範氏は、足利尊氏の命を受けて、駿遠の宮方を鎮定すべく、伊達景宗をして、かえて駿河に入り、先ず石堂入道義房の部将佐竹入道、葉科某等の官軍が、大津城(志太郡大津村落合)に拠れるをもつて、東光寺を中心とし、之を対の城として攻撃準備を成し、八月二十日より攻撃を開始し、連戦して九月九日遂に大津城を攻略し、そして当城を駿河攻略の拠点となした。

一方敗退した佐竹、葉科氏は、当時西駿山地方面に雄視せる徳山城の土岐氏に拠りて同城に入り、城將土岐彦太郎と共に防戦準備をなした。正平八年(文和二年、一三五三)二月十日、範氏は進んで徳山城を攻撃した。この攻撃開始迄に、其の沿道に当る大間城、石上城などの攻撃陥落などの事は、伝説、口碑などによつてもその一般を推測することが出来る。

範氏は、徳山城を攻撃したが、城が堅固で正面攻撃が功を奏さなかつたので、別將伊達景宗、搦手の葉科口(口)に較じ側背に迫り、十一日には支城、藪多和城(大川村日向秋平、現静岡市)を、十三日には、護庇土城(東川根村上洗合土、現本川根町)を攻略し、遂に本城に迫り、範氏と協力を以て二十五日遂にこれを攻略し、徳山城は今川氏の手に歸した事は、伊達文書により明らかである。(伊達文書は、京都大学文学部所蔵) 即ち

伊達 石近將監景宗申す軍忠事

右為徳山凶徒討治就成御教書。二月十日御発向之間、罷向搦手葉科越。同十一日藪多和城致後攻。御敵退落畢。次同十三日押寄護庇土城。致至極合戦。切入城内。追落御敵等被成畢。同十六日取朝日山陣。同十八日鶴彦太郎攻城西尾四位多和取奇陣。抽夜攻戰功處。同二十五日夜御敵鶴彦太郎親類兄弟並に石塔入道殿家人佐竹兵庫入道葉科以下凶徒命没落説。然早賜御判為後証備。恐々言上如件。

文和二年二月 日

承了(今川範氏 花押)

右文書読下し

伊達石近將監景宗申す軍忠の事

右、徳山凶徒討治の為、御教書成らるるに就き、二月十日御発向の間、搦手、葉科越に罷り向ひ、同十一日、藪多和城後攻めを致し、御敵退い落とく畢んぬ。

次いで、同十三日、護庇土城に押し寄せ、至極の合戦を致し、城内に切り入り、御敵等退い落とし、疵を被り畢んぬ。同十六日、朝日山に陣を取り、同十八日、鶴彦太郎の城を攻め、西尾(指)四位多和を取り陣を寄せ、夜攻の戦攻を抽んすところ、同二十五日夜、御敵鶴彦太郎、親類兄弟並に、石塔入道殿家人佐竹兵庫入道、葉科以下凶徒、没落せしめ説ぬ。然れば早く御判を賜り、後証に備えとす。恐々言上件の如し。

徳山城陥落後、土岐氏等の消息は明らかでないが、敵の攻撃の正面は大体に於て西方であつたのと、南方は今川軍の後方連絡線であり、北方は既に敵の為に占領されているから、夜陰に乗じ、小猿(本川根町小猿郷)方向に落ちて、一部は葉科氏との関係上

—この時期中央は—

- 1334年 建武中興、天皇親政
- 1336年 湊川の戦い
尊氏・建武式目17条を制定
(南北朝の対立)
- 1338年 尊氏 征夷大将軍となる
- 1339年 後醍醐天皇没(52才)
- 1348年 田原の戦い
- 1350年 尊氏 直義 不和
- 1352年 尊氏 直義を殺害
- 1353年 尊氏 義詮ら後光厳
天皇を奉じて入京
- 1354年 北島親房没(62才)
- 1358年 足利尊氏没(54才)

1353年 = 文和2年(北朝元号)
= 正平8年(南朝元号)

余録

- ① 今川氏真敗走に関しては、
徳山大衆院に寄った事、水川、白羽山
を経た事が言い伝えられています。
- ② 武田氏退走に関しては、
徳山に信玄どおりがあったり、三津間
依漢尊師堂が焼きうらにあって、山深く
にけたりの言い伝えがあります。

伊達景宗の戦歴



狩野氏の安倍城に入り、一部は薬科川奥深く進入したものの想像
できる節がある。徳山城攻略後、今川氏は更に追撃を続行しな
いで、巨兵を収め大津城に帰り、同城を本拠として更に駿州攻
略の歩を進めた。

今川氏駿州平定の後、土岐氏は之れが節度に服したか、永祿十二年
十二月十二日(一五六八)武田信玄が駿河に乱入した時、今川氏真は、
清見寺に本陣を置いて之を拒止せんとしたが、その鋭鋒に当る由も
なく遂に駿府城を捨てて土岐の山家へ落ちた。この山家とは徳山
城と小長谷城をさすもので、この頃土岐氏は堀の内(現徳山)の森の
段より、居館を天王山の徳谷城(小長谷城)に移していた。

しかし間もなく遠州掛川城主、朝比奈備中守泰朝は、主君氏真
を土岐の山家より迎える為め、土岐氏(この頃は既に小長谷氏を
稱す)は、武田氏に隷属し、小長井定近は、武田氏の為にしほし
は、戦功を立てている。

武田氏滅亡後は、小長井政房は、徳川氏に出仕し、二人は民間
に隠れ、その内一人は、岡部西山に住し、小長井弥左衛門則房と
稱したとの事である。この様にして、数百年間、土岐氏の有て
あった、徳山城、徳谷城らは壊滅し去ったのである。

以下次回号に続きます。

定期講読のお願い

中川根ふる里通信は有料発行です。

1部 千円 150円

皆様の定期購読がふる里通信の発行を支えます。年間4回(季刊誌)の発行を予定しております。今回で購読期間の切れる方には郵便振替用紙を同封致しますから引き続きご購読をお願いします。年間予約600円のご送金をおすすめします。住所変更のおりも是非ご連絡下さい。



※払込通知票

口座番号 名古屋<7>-81556
加入者名 中川根ふる里通信会

※ふる里通信に関する問い合わせ先

発行責任者

428-03 榛原郡中川根町上長尾859~6

小沢 節子

TEL. 0547-56-0015



二三年前から町企画課(前総務課)で、中川根町のオリジナルカレンダーをつくり、全家庭配付をして好評です。本年は町別施行三十周年を記念して、昭和三十年代の写真をもとに、思い出のアルバム。又現在との比較など、とても面白いカレンダーが出来ました。皆様にも是非お目にかけて欲しいと思います。今回よりお届け致します。その当時の様子など、語って下さった方々もご紹介させていただきます。楽しみばして下さいます。

早いものです。ね、ふる里通信も今春で七年目に入ります。山あり谷あり、こうして続けてこられたのも、皆様あっての事でございます。どうぞ、この先も、ご支援、ご協力をお願い申し上げます。投稿、寄稿、この様な事が知りたいなど、ご意見が、ありましたら、ぜひ、お寄せ下さい。お待ちしております。



昨秋、天竜市出身の本田宗一郎さんがお亡くなりになりました。戦後間もなく、自転車に山登り用機を駆りつけた。発動機付自転車(横がし)に住んでおられた山田しげじさんも、同発想のものをつくりました。通称、バタバタ。商品化されたのかどうかは判りませんが、その頃何人かの方が乗ったそうです。後、山田さんは、島田市に住まれてすでに故人となられています。山田さんは、世界のホンダにはなれませんでした。が、発明された心意気を、たまたまたいものです。



一月三十一日、静岡県地震防災センターに見学に行きました。いろいろ見せてもらい、震度、防火、けむり等の体験もしました。近い将来、東海地震が来ると予測されて早十年、防災訓練も形式的になり、個々のそなえもおこたりがちではないでしょうか。地球的層にて、将来かならず来るそうです。そして翌日、関東地方は大雪に見舞われました。こんな時、地震が来たら大変だな。翌日、当地方は大震れだったと報道されました。そなえあればうれしいなし。今一度地震対策を考えました。



一月は、冬らしい日が続きました。二月になって山々には雪が降り、雨が降り、節分、そして立春。今日はとても暖かな日差しがさして、雨上がりの木々がキラキラ輝いています。ひきかえらるも、活動しはじめています。山野の池で夜通しかかって産卵します。野の草花もロゼット状にて冬ごししたのが、葉を立てています。梅の花も咲いて、いつにはなく、春の訪れが早い様に感じます。とは言いましても、二月、寒さもまだまだやっ来て来ると、風邪など引かない様子を付けて下さい。発刊日、少々おくれなりました。ごめん下さい。